

能登の風に吹かれて

かつて日本の風物詩だった子どもの凧揚げ遊び。
時代の流れの中で、その姿を見ることは減っていった。
能登町では、20年以上前から凧揚げを楽しむ大会が開かれている。
日本中から凧揚げ仲間が集う、全国に誇れる大会。
しかし、地元の参加数が年々減少しているという現実もある。
『凧』を通して全国と交流し、地域が団結し、みんなが笑顔になる。
『全国凧あげ能登大会』の価値、魅力、そして課題を考えてみたい。



風を起こす



アエノコト風の反りを調整する小谷一郎さん

平成3年3月18日、柳田植物公園の空に初めて50枚の風が揚がった。「風揚げで地域おこし」の夢を追った若者たち。その情熱は途絶えることなく、今年も能登の空に風が舞い上がった。なぜ能登で風なのか。その歴史をひもとく。

風で地域おこしを

「たかが風。されど風。風は和紙と竹で作る芸術品だと思っただ」

のちに能登町内で風作りの第一人者となる小谷一郎さん(52) Ⅱ上町Ⅱは、風との出会いをこう振り返る。

平成元年、柳田植物公園に『お祭り広場』が完成した。旧柳田村は、このスペースの活用方法を模索。『風揚げ大会』の案が浮かんだ。

小谷さんは、有志らと富山県旧大門町や内灘町の風揚げ大会を視察。柳田でもできるという手応えを感じた。

当時、風揚げや風作りは全国的に静かなブーム。その追い風に乘って、交流人口の拡大と地域活性化につなげようと平成3年、村観光協会主催

で『第1回全能登ふれあい風あげまつり』が開催された。

全国大会へ規模拡大

「石川県は風揚げの伝統がない地域。まずは村内に風を普及することを考えた」

小谷さんら10数人は平成5年、『能登やなぎだ風の会』を結成。全国大会の開催を目標に掲げ、風作りの指導や風作り教室、新生児に名前入りの風を贈るなどの普及活動を行った。

平成11年の第9回大会には、『日本の風の会』、堤昭明事務局長(当時)が視察。審査員として大会に参加し「風の骨組みは丁寧で、揚げ手の技術も高い。会場もすばらしく、日本に誇れる風揚げ大会だ」と絶賛した。

第10回大会を控えた平成

12年には、『日本の風の会』もでぎまさき茂出木雅章会長が小谷さんら支部員がいる柳田を訪れた。「すばらしい場所。ぜひ全国大会を開催しましょう」

茂出木会長の申し出を受け、第10回記念大会は『第1回全国風あげまつり柳田大会』として規模が拡大された。

『全国』の名を冠し、参加団体は大きく増加した。大会には、全国各地から51団体約400人が参加。大会前日には交流会を開催し、全国の風愛好家と交流も深めた。

能登町全体への普及を

第1回全国大会から実行委員長を務めた奥野清さんが亡くなって迎えた昨年、「もうやめるか」という話が出た。

「やめるのは簡単。清さんのためにも続けていきたい」と覚悟を決めた小谷さんは、実行委員長を引き受けた。

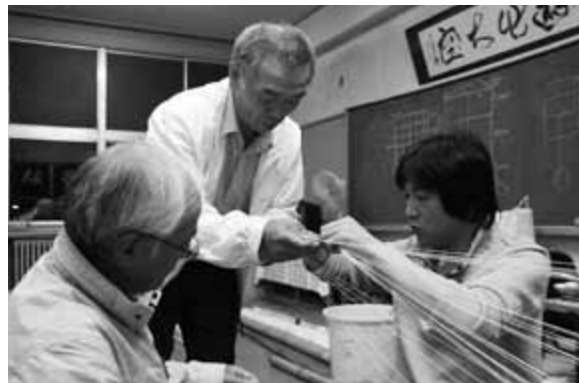
「参加数が減っているのが踏んばりどころ。能登町全体への普及に力を入れたい」小谷さんの風への情熱は、静かに燃え上がっている。



【上】大会前日の恒例イベントとなった交流会。北は関東一円から南は福岡県まで、全国から訪れた風愛好家と地元参加者や関係者など約80人参加。久しぶりの再会を喜び、風談義に花を咲かせた。



【左上】小谷さんが能登独自の風を目指して試作した「アエノコト風」
【右上】風作りの仕上げは「糸目(風糸を合わせる場所)」を決める作業。「糸目」の取り方で風が揚がるか決まる。
【下】風作りは共同作業。仲間に手伝ってもらいながら作業を進める。





03



02



05



04



07



06

01_ 舞い上がった風の糸をしっかりと引く 02_ 凧は縁起物。子どもの名前を書いた凧が揚がることで出世を願う 03_ 力を合わせて六疊凧を揚げる石井壮年団のメンバー 04_ 子どもたちも凧揚げに挑戦。しぐさや表情は一人前だ 05_ 巨大なアニメキャラクターの骨なし凧 06_ 「木郎村のゆかいな仲間たち」の六疊凧に子どもたちも参加。糸を引いて凧が揚がる感覚を体で覚えた 07_ 初めて会場で開催されたオークション



凧と遊ぶ

「良い風を予約します」
 東京都から毎年参加している加藤勝さんは参加申込書に毎年こう書き記している。
 「能登の凧は手ごわい」と全国の凧愛好家は口をそろえる。風を受けて大空に舞い上がる凧。裏を返せば風が吹かないと揚がらない。能登の凧は強すぎたり弱すぎたり、吹いたり吹かなかったりと一筋縄ではいかないらしい。
 10月21日に開催された第12回全国凧あげ能登大会。会場となった柳田植物公園には、関係者も驚くほど凧揚げに最適な風が吹き続けていた。
 大会は親子児童の部、全国有名凧の部、能登ふれあい凧あげの部のほか、凧オークションも開催された。
 日本各地で開催される凧揚げ大会の中でも、数少ない芝生広場の会場。全国から集まった凧愛好家や地元参加団体は、自慢の凧を能登の空に舞い上げらせ、凧揚げを満喫していた。

すばらしい凧が吹いた



【凧の八っちゃん】

長さ25m、幅5mの巨大なタコの凧。日本の凧の会が所有する。



【百足（むかで）凧】

連凧の一種。50枚でちょうど百の足がある。愛知県から参加。



【田原けんか凧】

凧を自由自在に操作し、糸を切り合う伝統の凧。愛知県田原市。



【高岡獅子凧】

富山県高岡市の伝統である獅子頭をモチーフにした凧。



【連凧】

さるかに合戦など昔話をモチーフにした連凧。徳島県から参加。



【江戸角凧】

長いうなり（音がでる仕組み）と長い糸目（凧から出る糸）が特徴。



【大門だるま凧】

青い目のだるまが特徴で大きさと形はさまざま。富山県射水市。

能登の空を舞った
 全国の有名凧や
 珍しい凧



風も人も入り乱れる迫力の大風合戦。勢い余って川に飛び込む参加者も出るほど盛り上がる。



初節句を迎える子どもたちの名前が書かれた「出世風」。これらの名前は家族が願いを込めて手書きしている。



自分で書いた「風文字」の風で風合戦する地元中学生。子どものころから親しむことで伝統をつなぐ。



クレーンにつり上げられる百畳風。約百人が心を一つに走り、引く。

全国の事例に学ぶ

地域の誇りとして風文化を守り伝える 「いかざき大風合戦」

～愛媛県内子町～
写真：内子町役場 文：西岡真貴

鎌倉時代から続く風揚げの伝統

愛媛県内子町の「いかざき大風合戦」。毎年5月5日に開かれ、数万人が約600統の風の乱舞を楽しみます。

始まりは鎌倉時代。生まれてきた子どもが元気で健やかに成長するよう、大風に子どもの名前を書いて端午の節句に揚げたこととされています。かつてこの地域一帯は和紙の大産地だったこともあり、風揚げが住民の娯楽として浸透。風合戦が盛んに行われるようになりました。「農業を怠けるので旧暦の4月20日から5月6日に制限する」という記録が残るほど、風揚げは住民の大きな楽しみでした。

その後、風合戦にルールが設けられたり、勝者が表彰されたりと、地域の一大イベントとして定着・発展を続けてきました。メインの大風合戦は、風糸に仕込んだ「ガガリ」と呼ばれる刃物で糸を切り、相手の風を落とす戦い。狙いを定めたら走って風を引っ張り、ガガリに糸を引っかけて切り落とします。

もう一つのメインが「初節句行事」。初節句を迎える子どもたちの名前を大風に書き、健やかな成長を願って大空へ揚げる風習は、今も昔も変わりません。

風と地域への愛情・誇りを次世代へ

長い歴史を誇るいかざき大風合戦では、地元住民の知恵やアイデアで、さまざまな取り組みが行われてきました。地域で盛んな俳句を生かした「俳句風」などのコンテスト、大風合戦の起源を表現する伝統の風踊り、和太鼓演奏や少年剣道大会などが繰り返されます。近年は百畳大風を揚げるという試みも始めました。

中でも昭和49年に始まった地元五十崎中学校の全男子生徒による「風文字コンテスト」は、「風の文化」を次世代へつないでいます。これは、生徒が思い思いの漢字を「風文字」として描き、風の骨を組み、それに張り付けて作った風を審査するもの。何より、その風を使って実際に風合戦をするのが、一番血が騒ぐそうです。

さらに特筆すべきことは、これら風に使われる和紙が全て地元五十崎産の手すき和紙ということ。それが地域のこだわりであり誇りです。

「いかざき大風合戦」は、風合戦と地域を愛する住民たちが楽しみながら発展させ、それを子どもたちに背中から伝えている祭りです。

世界に誇る日本の風 その第一人者に聞く 能登大会と風の普及

日本の風の会 会長 / 風の博物館 館長

茂出木 雅章さん

もでぎ・まさあき
東京日本橋にある老舗洋食屋「たいめいけん」二代目店主。テレビの料理番組などに多数出演のほか、料理本や風の本など出版多数。



能登の大会には5、6回参加しています。能登は自然豊かで新鮮な海の幸と山の幸があり、お酒もおいしいすばらしい所だと思います。初めて大会を見たときには、町の人も子どもたちも一緒になって風揚げを楽しんでいて、すばらしい大会だと感じました。近年は地元の参加数が減っているということですが、風文化を盛り上げることは簡単ではありません。子どもたちに風作り教室を開いて子ども大会を開催するなど、長い目で見て風の文化を育ててほしいと思います。

都会の人を呼び込むためには、観光ツアーとセットにしたり、ほかのイベントとの相乗効果を狙ったりと、大会に人が集まる工夫も大切です。マンネリ化は必ず起きます。新しいことを取り入れながら、能登の大会を伝統ある大会に育ててください。

日本の風の会 / 江戸風保存会 絵師

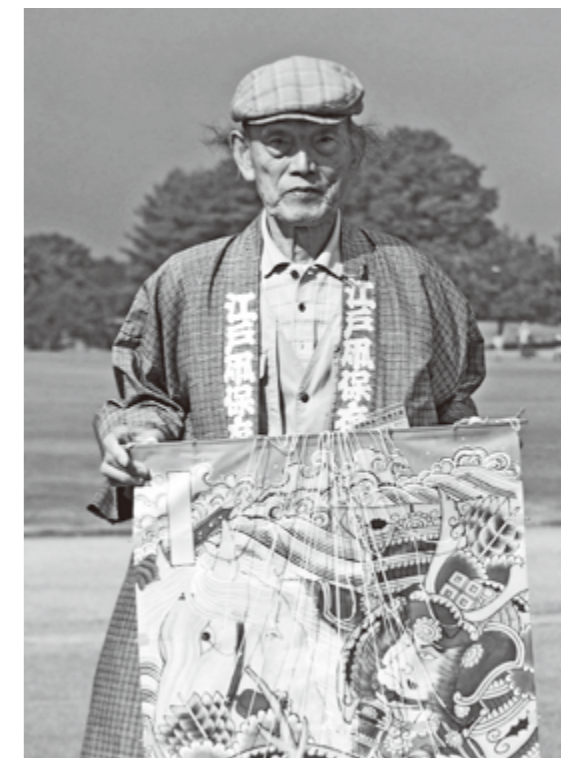
岸田 哲弥さん

きしだ・てつや
60年以上江戸風を作り続ける第一人者。
靖国神社と護国神社(名古屋市)に岸田さん作の江戸風が奉納されている。

能登の皆さんの人柄にほれて、風を通した良いお付き合いをさせてもらっています。88歳になった今でも全国の大会に参加していますが、能登の会場は本当にすばらしい。これだけ芝生がきれいに手入れされている風揚げ会場は全国どこにもありません。

風揚げの面白さは、自分で作った風が空に揚がっているのを眺めること。風の普及のためには、子どものころから風に興味を持ってもらうことが第一であり、そのためにも子どもたちに絵や骨組みから自分で作らせ、「自分の風」を揚げてほしいと思います。

長年やってきた絵師として風作りに関して伝えることは、中途半端なものを作らないということです。「自分でこれ以上のものは作れない」「完璧は作れなくても完全に近いものを作る」という思いで風を作り続ければ、きっと進歩していきます。



風に吹かれて

どれだけ立派な会場であっても、全国から凧愛好家が集まっても、地元が楽しみ、盛り上がりなければ「凧文化」の風は吹かず、大会は存続していかない。10年以上参加を続ける団体に凧揚げの魅力を聞いた。

団長
中田博之さん(42)・石井



凧を通して世代間交流

石井壮年団として平成11年の大会から参加しています。風がまったく吹かない時に、何度も何度も走ったことが一番印象に残っています。

壮年団メンバーは普段、それぞれが忙しくてなかなか集まる機会がありませんでした。みんなで集まって何カ月もかけて凧を作り、大会で凧を揚げ、さらに反省会。自分たちにとって『凧』はみんなが集まるツールです。凧を通して壮年団の絆が強くなり、OBとなった地域の先輩たちとも交流することができます。

石井壮年団の団結に欠かせない『凧』。この大会が続く限り、参加したいと思っています。



石井壮年団



代表
新谷信之さん(54)・不動寺

凧作りは仲間づくり

10年以上前、仲間と「何かやりたい」と話し合っている中で「凧揚げをやる」ことになりました。最初は小谷さんに一から凧作りを教えてもらい、2年目から自分たちで作りました。凧作りは仲間との共同作業。約1カ月、集まって話をしたり、子どもたちが絵を描いたりします。凧は仲間づくりにとっても良かったですね。

上空の風が手元で分かるロープの振動、うまく凧を下ろしたときのうれしさ。自分たちで作った凧が揚がると面白くなります。実行委員会の一人としても、「凧の面白さ」を地域の公民館や小学生に広めていければと思います。

木郎村のゆかいな仲間たち



能登には、昔から凧揚げ

に親しんできたという「凧の文化」がありません。そんな能登の人にとって凧は「子どもの遊び」であり、大人が真剣にやるものではないかもしれません。

「あえの風」「しかたの風」など、能登の人は「凧」に名前を付けてきました。私は「凧」がある能登に「凧」があっても良いのではないかと考えています。

凧は「奥が深い遊び」です。人は生きていくうえで「遊び心」が大切であり、「遊び心」が心に余裕を持たせるのだと思います。

なぜ凧が面白いのか。それは、人の「空への憧れ」があるのだと思います。自分で作った凧が上空に舞い上がる楽しさは、凧を作って揚げてみないと分かりません。

大凧であれば、絵が得意な人、手先が器用な人などいろいろな人が集まって一つのものを作り、みんなで力を合

せて揚げます。その達成感を感じることができるとも凧揚げの魅力です。

一年に一度、子どもや孫と一緒に童心に帰って凧を揚げる日。みんなで凧揚げを楽しむ日。みんなで凧揚げを楽しむ日。みんなで凧揚げを楽しむ日。

これまで大会を20年続けてきて、凧が能登の文化になるにはほど遠いと感じています。まずはこの大会を続けていくこと。そして能登町全体のイベントとして、町民の皆さんにもっと凧のことを知ってもらえるよう普及活動に力

一年に一度くらい、

大人も子どもも凧揚げを 楽しむ日があっても良い。

を入れていきたいと思っています。

大会をこれからも続けていくためには、地元の盛り上がりが必要ですね。凧を作りたいと思ったら、気軽に連絡してください。

来年の秋、一緒に能登の風に吹かれましょう。

全国凧あげ能登大会実行委員会 委員長

小谷一郎さん

Kotani Ichiro

日本凧の会石川県やなぎだ支部
☎ 76-0042 (柳田郵便局内)

